

生活科

はじめに～今回の「教科書検討資料」について

今回は教科書の見本がなかなか届かず、この原稿の締め切りまでに、わずかな期間での検討しかなかった。またM社の見本は原稿の締め切りまでに間に合わなかった。今までも詳細に検討した結果を伝えるというよりも、検討の視点を伝えることに重点を置いてきたのだが、今回はなお更に検討が不十分に終わった点をご容赦願いたい。

この冊子を読めば教科書を検討したことになるわけでは決してなく、どのような視点で検討したらよいかを参考にしていただきながら、実際にご自身で教科書の検討に当たっていただければ幸いである。

1. 学習指導要領の改訂でどう変わったか

(1) 生活科の大きな経過

生活科ができて2度目の学習指導要領の改訂をむかえた。生活科ができた当初は様々な編集視点があり、バラエティに富んだ教科書ができて

いた。その中には、かつての低学年理科・社会科で学習していた内容がかなり残されていた。その後、「しつけ・道徳的」と批判された部分も次第に薄まっていったと同時に、かつて理科や社会で学習していた内容もどんどん消えていってしまい、活動そのものが前面に出るようになり、この社も同じような内容の教科書を作るようになってきた。

今回の学習指導要領の改訂では、「ゆとり教育の見直し」から、自然や社会に働きかける内容が増えることを期待できる一方で、どの教科にも道徳と関連させた内容が盛り込まれることになったことの反映や、「言語活動の充実」がどのような形で表れているかなどの点も注目したい。

(2) 今回の大きな特徴

教科書を手にしてまず気がつくのは、ほぼどの社もページを増やしたことである。登場する生き物の数が増え、生き物の名前がつくようになったのも大きな流れとして指摘できるであろう。また、平成12年度の学習指導要領で削除されていた「働く人」という言葉が復活したことを受けてであろうか、どの社も学校探検の中に蛍光灯を取り替える主事さんの絵や写真が復活した。全体としては、相変わらずの活動主義ではあるが、ただ活動することだけに終わらずに、気付かせたい内容を意識した編集になってきたといえるだろう。

この点に関して、過去のこの『検討資料』で指摘した点が多く取り入れられたように思われると言えば、手前味噌に過ぎるだろうが、学習指導要領の改訂によって目標や内容に「気付く」が多くなくなったために、取り上げやすくなった面があることは否定できないだろう。では、どのようなことに気づかせたいのか。低学年でも見つけやすく、しかも本質的なとらえ方に迫るものは何か？ という面で現場からの意見を出すことの大切さを改めて感じた。

また、道徳との関連も含めて他教科とのいっそうの関連を求められたことを受けて、ページごとには他教科との関連を明確に印した教科書も現れた。全体的には具体的に印していない社も多いが、道徳との関連で、

安全や感謝・思いやりなどが以前に増して強調されているようである。中には見開き2ページ使って「いかのおすし」を載せた社もあった。

また、「言語活動の充実」から、カードに書く、発表する、伝え合う、などの活動が増えた。中には巻末の「図鑑」に話型まで示している社もある。「1、2年生はもっと文章を書けるようになる。」という点も毎回主張してきたが、今回、観察カードや振り返りカードなどの字数が多くなったように思う。ただ、本当に子どもがこのように書くのか、疑問なものも多いので注意して検討してみたい。

自然について

年間を通して自然にはたらきかける子どもに

感性を豊かにし、バランスのとれた発達を促す上でも、子どもの「自然離れ」が深刻です。まずは、年間を通して子どもたちの生活の中に自然を取り入れる視点がほしいところです。どの社も学校の周りや、野原などでいる自然に触れるようになっていますが、もう一歩踏み込んで、手にとって観たり、虫眼鏡を使って細かく調べたり、割って中を調べてみたりといった、意図的なはたらきかけ方をもっと示してほしい。

また、自然にはたらきかける中で、例えば「花が咲いたあとに実(種)ができる」「卵を産む」など、「生き物が栄養をとって成長し、子孫を残す」という、本質的なとらえ方につながる事実に注目させたい。

飼育・栽培

どの社も何種類もの花や野菜を登場させていますが、こんなにたくさん種の種類を登場させる必要があるのか、疑問です。地域の実情に合ったものを、しかも、何を学ばせたいかによって、選択し手取り組むようにしたい。

各社の検討から (㊤は上巻、㊦は下巻)

G社 ㊤「ものしりコーナー」に草花遊びや川原での遊びを紹介しているのは良いが、生き物をていねいに探したり、調べたりしている様子が少ない。アサガオの栽培で「わたしの あさがお」というカードを示していて、葉を触ってみた感じが書かれているのは良いが、心情的な面が強調され過ぎる。「いきもの だいすき」も「なかよく なりたいね」「よろこんで くれるかな」など真情の押し付けが目立つ。巻末の「いきものずかん」は以前より充実。巻末の「むしたちのかくれんぼ」も良い視点。

㊦町たんけんや、「四季の「町のきせつずかん」に生き物が少ない。「キャベツばたけに モンシロチャウ」はいい視点。「生きものともだち」ではザリガニの脱皮や誕生は本質的なとらえかたにつながるが、全体としてかわいがるという心情的な面が強い。飼い方ももう少し詳しく紹介してほしい。巻末の「学びかたずかん」の中の「じょうずな 見かたの ひみつ」は、五感をフルに使うことを促し、比較したり考えたりすることもあって良いが、やはり本文の中にこうした姿勢を示してほしい。

・野菜の栽培は大きな扱いとなっているが、やや心情的な動きかけが目につく。花から実が丁寧に見えている様子もあるが、栽培を通して生きている姿に迫るといって視点が薄い。

KSS社 ㊤以前は各季節ごとに学校の周りの様子や生き物を探している様子などがあり。生き物図鑑も充実していたが、図鑑が学び方中心になってしまった。「はるの なかまたち」が春の生きもの図鑑になっているが、他の季節にもこれくらいくわしい図鑑がほしい。アサガオの栽培も以前より心情的な言葉が増えたが、本葉が出る、つるがのびるなど、生長の節目ごとに観察させる視点はある。「げんきにそだて」(飼育)に心情的な面が強調されるようになり、自然を見せようと

言う視点が後退したようだ。

㊦動物がどんなところにいるか、どんなことをするか、比較的詳しく扱っているが、やはり心情的な呼びかけやとらえ方が目につくようになっている。秋や冬の生き物は出てこない。野菜の栽培も同様に心情面が強まっている。クイズで野菜の種や昆虫がかくれている様子があるのはおもしろい。「はってん」で、昆虫の体のつくりや、植物の根に注目させている。

KE社 ㊧校庭の同じ場所の絵が春夏秋冬あり、公園や野原も春と秋の絵がある。年間を通して自然を見させようという意図は伝わる。「生きもの なかよし」には虫眼鏡でゾンゴムンを見ている子もいて、丁寧に調べさせようという視点は感じられ、心情的なよびかけやとらえ方は控えめになっている。生き物の資料の少なさは、後述の図鑑で必要となるを補えるようになっている。

㊨「げんきに そだて」の中には、どんなところに、どんな生きものがあるか、探してみている様子が見られる。ザリガニの誕生やセミの羽化なども出てくる。「生きもの クイズ」で昆虫の口の形といっしょに食べ物が書いてあるのはよい視点。町の四季の様子が描かれているが、その中で生き物が少ないのは残念。図鑑で補うということだろう。栽培では、花から実への変化を写真で見せ、「よく見よう」と呼びかけているところはよい視点。触って見た感じもよい。実ができたキュウリ、トマト、ピーマンの鉢をならべて「にているところ、ちがうところは どんな ところかな？」は、指導要領の影響だろう。よい視点だが、ここでは少し無理を感じる。冬野菜も簡単に紹介している。**KE社** (図鑑) 他の社がほとんど巻末に図鑑をつけるようになったが、KE社は今回、図鑑を上・下巻共通で独立した冊子にした。ある意味では便利ともいえる。内容は草花遊び、おもちゃ作り、昔の遊び、自然の図鑑、育て方、調べ方、まとめ方など、ほぼ全領域にわたっている。月や星、雲など、生き物以外の自然が出てくるのはよい。自然の図鑑には種の散布、産卵など大切な視点もある。

下社 ㊩季節ごとのページにある生きものに名前がついていないと思っ

たら、巻末の図鑑で調べることになっているようだ。図鑑は簡単なものだが、五感を使って自然へのはたらきかけを促しているので、うまく利用したい。アサガオの栽培でも触ってみることを促している点はいいが、花から実への変化を丁寧にとらえさせたい。「いきものとなかよし」では、虫さがしの様子が描かれており、飼い方もいくつつか紹介されている。四季ごとに公園に行くことを促している点もうまく利用したい。全体として、自然への働きかけを促しているところはよいが、本質的なとらえ方につながる事実をとらえたような例が乏しい。

㊪下巻でも季節ごとの「図鑑」ページがあるのはよい。サクラ、タンポポ、カマキリ、カエルの4つの生き物は季節ごとの様子が写真にあり、年間を通して観察させようという意図は感じる。「生きもの なかよし 大作せん」では、どんなところをさがすか、どうさがすか、など話し合うように呼びかけてあり、脱皮や羽化など本質的な内容につながる事実も取り上げている。飼い方も比較的詳しく、チョウが成虫になるまでを写真で紹介もしている。ザリガニのオスとメスの見分け方もよい。「空を見よう」もよい視点だが、雲と虹だけで月や星も取り上げたい。野菜の栽培では、育て方や世話は比較的丁寧に書いているが、生長の節目ごとに観察したり、花から実への変化をとらえさせる視点が弱い。

N社 ㊫校庭探検の絵では、飼育小屋や池をのぞき込んだり、チョウを見つけたり、地面をじっとのぞきこんだりしている子が描かれている。ゾンゴムン、えさを運ぶおびり、レンジとミツバチなど、よい視点の写真も登場するようになった。季節ごとの散歩の中に、生き物を探している様子や、生き物の写真もあるが、取り立てて虫探しをする單元はない。ツバメがヒナにえさを上げている観察カードや、セミの羽化の写真などよい視点の写真もあるが、断片的であり、生き物の本質的な姿に迫ろうという視点が感じられない。花の栽培で、いろいろな種を紹介しているのは他社と同じだが、アサガオを特に目立たせていない

のはめずらしい。「なにを そだてようかな」という子どもの思いを大切にということだろうか？「なりきり かあど」でアサガオになりきって感謝の気持ちを伝えていますが、自然を客観的に見る目を育てようという立場からはやめさせたい。もっとも、1学期のこの時期にこれだけ文章を書かせるかも疑問だが。「ひとつぶの たねから こんな たくさん」は大事な視点だが、栽培全体を通して心情的に関わらせようとしている。

①野菜の栽培の前に「何を そだて 食べようか」というページがあるが、バナナ、干瓢、大根、小麦などは子ども達の発想から出てくるのだろうか？もし「バナナを育てたい」という「願い」が出たらその願いを大切にできるのか、疑問がある。「ポケットずかん」ではミニトマト、サツマイモ、ダイズの育て方と育つ様子があるが、「やさしいがピンチ」でまた「なりきり カード」が出てきて野菜の気もち、野菜を食べる虫の気もち、自分の気もちを書く欄があるが、大いに疑問。「生きもの みんな 出ておいで」で、「どんな ところに いるかな」と、すみかを丁寧に見ているのは良い視点だが、「生きもの の 気もちに なってみよう」など、心情的な関わりを重視している。

D社 ④通学路のページには、あたりの動物や野草の写真を載せているが、春に生きものを採っている様子がない。「あきと ふれあおう」では、「この みは あの きから おちんだよ」というふきだしがあったり、五官を使うことを促している。「あきの きの みとおちば」で葉と実を並べて示しているのは良い視点。「ひつつきむし」をたくさん紹介しているのも種の産婦につながる視点。冬芽と、冬越しの様子もある。巻末に野草と昆虫の図鑑がある。栽培ではダイズやラッカセイの花も載せている。が、もう少し花から実への変化を注目させたい。「いきものと なかよし」は、心情的な面はひかえて虫眼鏡でよく見る様子なども載せている。「ひかりと かげで あそぼう」もよい視点（おもちやづくりについてのN社（上）も参照）。

①ピンゴカードが良いのかどうかはともかく、五官を使い、虫眼鏡も使

い、春の生き物にはたらきかけさせようという意図は感じる。続いて「どんなところに どんな いきものが いるのかな」という吹き出しがあったり、ザリガニの脱皮や卵からの孵化の写真を載せたりと、本質的なとらえ方につながる視点はある。セミやカゲロウの一生を扱っているのも参考になる。「夜の長さって どのくらいかな」もおもしろいが、試してみるのには困難。野菜の栽培はもう少し丁寧に載せてほしいとおもう。

おもちやづくりについて

かつての理科の中には動くおもちや作りがあった。生活科になってから次第に姿を消していき、『遊び広場』『おもちやランド』などのようなイベント的な内容へと変わっていった。今回学習指導要領の改訂では「理数教育の充実」でおもちや作りがまた復活することになり、各社とも内容が増えた。しかし、単元としては相変わらずイベントの中でグループごとにおもちや作りをする展開が多い。

学習指導要領の『解説』を読むと、おもちやをよく動くように工夫したのになかなか動かなかったことも「自然の不思議さに気付いた」ことになる、読みとれる。「気付いたことを基に考えさせる」（指導要領）というならば、物を動かす原理やしぐみを使って動くおもちやを作りながら、簡単なものから次第に発展させていくことによって、原理や仕組みを利用して工夫できるようにすることを大切にしたい。それには、グループごとに別々のおもちやを作るのではなく、クラスみんなで共通のものを作りながら、工夫を学びあえるような授業にしたい。

〈検討の観点〉

- 全員がつかうことができるか。
- 子どもたちが、教科書を見てつくることができるか。
- 動くしぐみがわかるようになってくるか。
- 工夫し、発展できるようにしているか。

- 一つの題材を学習集団みんなですつくる中で、学び合い、教え合いができればよくなるか。

N社（上）

- おもちゃ作りの独立した単元がなく、「みんなですつくりて あそぼうよ」ではあいかわらず、それぞれのコーナーでのお店屋さんごっこ。お年寄りや障害者、外国人や保育園児などとの交流が主目的となっていて、「作って遊んで、交流して楽しかったね」で終わってしまう。
- 「みんなであそぼう」の中にシャボン玉があるが、「友だちづくり」単元のなかなので、工夫を促すようにはなっていない。
- 秋の「ポケット ずかん」から「こんなに あったよ みんなのあき」にいたるページには落ち葉やポングリを利用したおもちゃがいろいろ紹介されているが、つくり方が少しかかるのがポングリごまくらい。なお、ポングリごまのコーナーで、小さい子もいるのに机の上には錐が2本ころがったままなのは間違いない？
- 冬の「きたかせの アルバム」での“アイスクリーム作り”。「学校の裏の雪にジュースの入った容器を埋めて」なんて、どこか地方でもできるわけでもないし、冬に見られる自然現象を見つけない方がよいのでは？
- 冬の「ポケット ずかん」。“たこあげ”ではゼニヤグニヤだこがつくり方と一緒に紹介されている。しかし、1年生がポリ袋に3対4のマス目を書いて切り取ることができるだろうか。工作用紙などを利用した下敷きを使う方がいいだろうか、それでもやや難しい。
- 同じ場所に「かげえ あそび」がある。どうせやるなら手の組み方だけでなく、厚紙や色セロファンで人形などをつくって遊べば、影が黒いのは光を遮断するからという経験につながるだろう。
- 「ようぐの つかいかた」が載っているのはいいが、その都度ここを見るときは紙の方を回して」とか、カッターナイフでは「刃の進む方向を置かないで」など。細かいことは、具体的な場面で注釈を入れた

方が効果的かもしれない。

N社（下）

- 「あそびの広場」では上巻と同じくコーナーに分かれての遊び。クラス学習集団全員で一つのことに取り組みわけではないので、学習としての深まりは期待できない。
- 「あそびの広場」に向けての準備である「アイデア いっぱい ゆめ いっぱい」ではコーナーを担当するグループごとに設計図を描きながら話し合いをさせ、教師はそれを見ている状況。これは低学年には無理。ただ活動するだけになってしまう。
- 巻末の図鑑には、クラスみんなで取り組ませる学習に利用できそうなものもある。ヨットカーを“風で動かすおもちゃづくり”に、鳴らし遊ぶ楽器づくりはストローふえも入れて“音づくり”の学習に、魚釣りには“じしゃく”の学習にという具合に利用できそうである。

K S社（上）

- 「なつの こうきを かんじよう」で「どんな しゃぼんだまができるかな」と問いかけ、3種類の道具を絵で載せているのは発展性、工夫を促す面でよい。ただ、シャボン液については何も書かれていない。同じところで、ペットボトルなどの容器に入れた水を掛け合う遊びも紹介している。これだけだと生活科で扱う内容としては足りないが、「アールのときにでもやってみよう」という呼びかけなら上の学年の「空気と水」の学習経験になりうる。
- 「あきと あそぼう」では、簡単なつくり方とともにいくつか実を使っておもちゃが紹介されている。ポングリやじろべえは「やじろべえ」の学習に、ポングリごまは「ごま」の学習に、マラカスは「音づくり」の学習につなげて、クラスみんなで取り組みたいが、やはり「あきの たからものランド」などというお店屋さんごっこにならなくて、学習内容の深まりは期待できない。
- 「かせと ともだち」は、ゼニヤグニヤだこが紹介されているが、低学年の子がこのつくり方の図を見つくるのは難しいだろう。ポリ袋

に空気を集めている写真があるので、これを利用して「風で動くおもちゃ」の学数に発展させたい。

- 巻末図鑑の「どうぐの たつじん」でのはさみの使い方はわりとていねいに書かれているが、これだけではないので、細かいことは具体的なところで注釈を入れるといいかもしれない。

K S 社 (下)

- この「作って ためして」も、やはり“おもちゃランド”になっていて、グループごとの活動になっており、教科学習としての深まりは期待できないが、内容的にはクラスの学習集団全員で取り組む学習に発展させることができそうなものもある。帆かけ車やパラシュートは「風(空気)で動くおもちゃ」に、魚釣り「じしゃく」の学習に、ロケット、カタコト車やびんガエルは「ゴムで動くおもちゃ」の学習に発展させるようにしたい。実際に『はってん』として「じ石に くっつくものは 何で できているかな」という問いかけがある。唐突ではあるが、『磁石で鉄さがし』の実践を入れ込みやすくなる。

- ここでは、「いろいろな 力を見つけて出そう」と呼びかけている。「風の力」、「ゴムの力」など、子ども自身が考えてノートに書いたならともかく、ここで“力”を使うのは問題。「ねじってもどるから動く」とか「折った紙をこんな風に取りつけると風をいっぱい受けて走る」などと動く原理に気がつくところを、なんでも“力”という言葉ですませてしまうことになり、疑問である。無理に「力」という言葉を使わずに、「よく動くものをつくらう」と呼びかけ、動くしくみに気がつかせるような流れにすべき。

G 社 (上)

- 秋の落ち葉や実でのおもちゃづくりは、お屋さんごっここのようになっ
ていて、クラスのみんなで取り組む教科学習としての深まりは期待で
きない。ボンズリごまは「ごま」、ボンズリのマラカスやイタパリの
ふえは「音づくり」の学習につなげたい。
- 巻末の「どうぐの つかいかた」は簡単な扱い。

G 社 (下)

- 「つくってあそぼう」では、いくつのおもちゃが、とてもていねいな
つくり方の図とともに紹介されている。「よく はしる 車にし
たいね」という呼びかけも自然。「(友だちの作品と)くらべて
みると わかりやすいね」と、学び合い、教え合いを促しているのも
いい。

ただ、やはり最後はおもちゃランドとなっていて、「うまいうごく
かな」のところでは、3種類のおもちゃが同じページに載っている
ので、やはりグループごとのおもちゃづくり活動になりかねない。それ
でも、おもちゃランドまでに扱われているのはゴムで動くおもちゃが
ほとんどであり、レーシングカーづくりが柱となっている。「ゴムで
動くおもちゃ」の単元としてクラスで取り組む学習に発展させやすい。
• 「ものしりノート」に出ているおもちゃは、ちょっとした時間や学活
などで利用するものだろうか、びっくりカエルは「ゴムで動くおもちゃ」
で、ギターは「音づくり」で、ズンズンごまは「ごまづくり」で、ご
ろりんは「おもりでうごくおもちゃ」で、ペットボットの船は「風で
動くおもちゃ」で、その単元の一部として利用するのがいいだろう。

K E 社 (上)

- 秋の落ち葉やボンズリで作るおもちゃにはこまやじろべえ、でん
でん太鼓などいろいろ紹介されているが、グループごとの制作で幼稚
園児を招待した「あきまつり」につなげており、クラスの学習集団全
員による学習にはならない。つくり方も、一部が別冊「せいかつめ
いじん ブック」に一部載っているだけ。

K E 社 (下)

- 別冊「せいかつ めいじん ブック」には、「かぜで あそぼう」「く
う気で あそぼう」「水で あそぼう」「じしゃくで あそぼう」「お
もりで あそぼう」「ゴムで あそぼう」と、それぞれ2つから5つ
ほどのおもちゃが紹介されており、かんたんなつくり方が載っている。
これだけを見ると、それぞれを単元に発展させてクラス全員で一つの

課題に取り組ませる学習に発展できるように考える。

しかし、教科書本体を見ると、グループごとにコーナーを担当しておもちや大会を開くようになっていいる。しかも、計画カードを書くなど、低学年にはむずかしい内容も含まれている。

Ｔ社（上）

・「みずで あそぼう」で、「みずでっぼう」「いろみず」「しゃぼんんだま」が作り方とともに掲載されている。水鉄砲はプラスチックの空き容器に水を入れて押し出して遊ぶだけだし、色水は植物の花から水に絞り出して「えを かいて みよう」で終わり。水鉄砲と色水に比べれば、シャボン玉はいろいろ呼びかけて工夫を促しているし、道具もストローと針金ハンガーが載っている。石けんをおろし器で削るのを紹介しているのはこの社だけ。100円ショップにおろし器があるので、危険性を考えれば液体せっけんよりもこの方がよいかもしれない。

・秋のおもちやづくりは、他社と同様グループごとにそれぞれのコーナーに分かれてのお店屋さんごっこ。学習集団全員の学習にはならない。こまやけん玉、ワラカスなどが、簡単なづくり方とともに紹介されている。

・冬の遊びでは、グニャグニャだこ、風輪、カラフルズロク（色水と雪でつくる氷）が紹介されている。色水は夏の遊びの色水をとっておくのだろうか？風輪はこれ単独でなく、風で動くおもちやに発展させて扱いたい。グニャグニャだこは各社とも同じ説明で載せているが、これを見るだけで子どもたちがほんとうにつくることができるのだろうか。

Ｔ社（下）

・「うごく おもちやをつくるう」は他社同様、やはりコーナーに分かれて作らせるようになっていいる。作ったあとに「くふうしたよ」を書かせるものの、何社かにあったような設計図を書かせるような記述はない。もっとも低学年なのだから「くふうしたよ」ではなく、「今日やったことを書こう」と呼びかけるのがよい。

ここではいろいなおもちやをつくり方とともに紹介しているが、コーナーに分かれるのではなく、クラス全員で「パッチンガエル」「とことこカメ」「びよんびよんウサギ」「びっくりばこ」「ゴムまき車」はゴムが伸びて縮む、ねじれてほどけるなど、順序を考えて「ゴムで動くおもちや」という一つの単元として取り組ませたい。時数も考えなければいけないが、「ヨットカー」はいくつかの教材と組み合わせせて「風で動くおもちや」「ころころころん」はこれまたいくつかの教材と組ませて「おもりで動くおもちや」としてみんなで取り組ませたい。カードに工夫してよくなったことなどが書かれてあるが、クラス全体で共通のものを作ってみることでよって、友だちの工夫を学びあい、動く原理を使って作り変えることができるようになるのである。

Ｄ社（上）

・「たのしく あそんだよ」では、“ほかけぶね”、“みずでっぼう”“しゃぼんだま”“すいしゃ”などが載っている。“みずでっぼう”はこれだけでは教科書種の内容にならないが、「プールのときに遊んでみよう」ということなら、上の学年の「空気と水」の経験となる。“ほかけぶね”は、これだけでなく、「風で動くおもちや」学習として発展させていたり、砂糖や台所洗剤を利用するなどシャボン液のつくり方にも触れている。ただ、単なるストローにシャボン液をつけて吹いている女の子の絵があるが、こうした場合は口に近いところに小さな穴を開けて吸い込まないようにすることも注意を払わせない。“すいしゃ”は、水で動かすという発想はいいが、絵では輪ゴムで棒に羽根を取りつけているのが、見てもよくわからない。

・秋の落ち葉や実を使ったおもちやづくりも、結局はお店屋さんごっこにつながり、クラスの学習集団全員で取り組む教科教育の内容とはなっていない。ポンヅリのコまは「こまづくり」の学習に、ポンヅリのやじるべえは「やじるべえ」の学習に、ワラカスは「音づくり」の学習

につなげたい。

・「おりがみ」は、手先が不器用になっているいまの子どもたちには大
事なことかもしれないが、図工や学活（お楽しみ会の景品や飾り）の
内容ではないか。

・「かせで あそんだよ」は単元が風で動くおもちゃづくりで統一され
ており、お店屋さんごっこのような形にはなっていないので、クラス
みんなで取り組む学習にできる。ピニルだこは、この説明だけで子ど
もたちがつくれるかどうか危ぶまれるが、ほかのおもちゃは図を見る
だけでつくれるだろう。

・「どうぐを じょうずに つかおう」でのほさみの使い方はわりとて
いねいに書かれているが、これだけではないので、細かいことは具体
的なところで注釈を入れるといいかもしれない。

D社（下）

・「はっけん くふう おもちゃ作り」では、数多くのおもちゃがつく
り方とともに掲載されている。“ほかけ車”ではペットロボットのふた
をタイヤにした絵を載せ、その横に「こんなタイヤでもいいね」とし
て紙粘土でつくる方法も乗せており、工夫を促している。お店屋さん
ごっこのような形にはなっていないが、いろいろ雑多なおもちゃをいっ
ぺんに載せているので、「好きなおもちゃを選んできよう」という
ことにもなりかねない。ここはやはり、帆かけ車や紙トソボは「風で
動くおもちゃ」、ジェットカーやコトコト人形、コトコト車、ピヨソ
ピヨソガエルは「ゴムで動くおもちゃ」、糸電話や怪獣スピーカー、
キロ、ペットロボトラカス、缶ぶえは「音づくり」、グラグラやフ
ワフワ人形、魚釣りは「じしゃく」の学習としてまとめ、クラスの学
習集団全員で取り組んでいきたい。そうすれば学び合い、教え合いも
自然に生まれ、学校外の大人に「どうしたら、うまくできますか」な
どと尋ねるような、おかしな学習にはならない。

社会について

まず上巻をめぐって見た印象では、この教科書で何を教えるのか、ど
んな力をつけようとしているのか、疑問を持った。生活科発足のときか
ら危ぐされていた道徳化は今回の新指導要領において、どの教科でもと
はっきりと示されるに到り、教科書のあちらこちらにみられる。挿絵や
写真の多かったところに言葉が入り、細かく画一化されるように指導が
入っている。

後退してきた生産と労働の視点にかかわる単元のひとつとしての「家
族、家の仕事」については、上巻において単元すらない社もあった。こ
れまで、お手伝いチャレンジ、いくつ出来たかと競わせるような学習活
動のあり方に課題はあったが、お手伝いというやりかたで家の仕事に気
つき、仕事をしながら労働の大切さや大変さ、苦心することの喜びなど
体験して感じ取っていたのである。社会のいちばん身近な単位としての
家族・家庭に眼を向けさせ、積極的にかかわる子どもにといった意味で
は是非とより上げた単元である。今回、家庭生活にかかわる活動からそ
ういった点では手を引いているが学習したことを家の人にきいてもら
うとか祖父母とのかかわりを持つとうとする場面の見られる教科書がみられ
るのは、学習内容が話す聞く書く表現するなどに重きを置いているから
であろうか。自分の学んだことを聞いてもらったり教えてもらったりす
る活動は、認識を深める意味で大切であり子どもも意欲的に取り組むと
思われる。

小1プロブレムが話題となっている中、学校は楽しくて自然や人とか
かわり、体験をとおして、活動主義ではない、学びを作っていく生活科
の果たす役割は大きい。幼稚園や保育園とのギャップをうめ、幼保連携
を意識してか、幼稚園保育園の生活と新しい学校生活につながるペー
ジをつくらっている教科書もある点、目新しい努力が見られる。

てきたことだが教科書では取り立ててなかった新しいとりくみ発想である。

「おすすめのばしょを2年生に教えてもらおう」はじめは2年生に案内してもらい、次は自分たちで行く場所を相談してでかける、学びに発展する。「わくわくどきどきすることを、さかしにいこう」のテーマは学校探検の意図がいかなものか？発見紹介のしかたがパターン化され、段階をへて紹介されている。語型もある。とりくみしやすいだろうか、自由さはどうか？

2. 家族・家の仕事にかかわって

道徳強化の今回の指導要領中、今までの取り組みと大きく変わり、いちばん影響を受け道徳そのものところのようです。単元名にも注目したい。この単元で家の仕事をして気づかせたいことや養いたい力はなにか。五感を働かせてしごとそのものから学ぶこと（道具やこつや苦心や時間など）、仕事や生活の段取りをする能力、家族とのかかわりなど社会認識につながる力を養いたいところである。家族・家庭は社会のいちばん小さな単位である。人は人の中で生活し生きのびてきた。生産と労働に結びついて考えられるところである。

G社 単元名「しあわせいっぱい」

家のしごと調べをして大きく描いている絵がよく、参考になる。「かぞくにしてもらっていることはね」「いえのしごとにはちょうせんするよ」「ありがとうがいっぱい」と感謝し、おれの手紙を書く道徳的な授業を推し進めている事が明確である。家の仕事そのものの学びの視点が無い。「じぶんではしていることはね」「できることがふえたね」では自分のことは自分とする（学習用具の用意、自分の靴洗ひ、遊び道具のかたづけなど）自立を図るための仕事体験し、出来ることが増えたことを自覚し成長を感じ自己肯定感が養われると思われる。自己中心的で家族の理解は図られていないように思われる。その中で感謝は教え込み。社会を見

る目を育てる糸口には遠いのではないか。

D社 単元がない。

T社 単元名「みんないっしょに」

「わたしのいちにち」のまとめカードは、工夫がみられる。「いえのひとといっしょにしよう」の吹き出しにある言葉は必要だろうか。写真は家族の交流のようすで理想の家族像がえがかれているようである。「ありがとうをとどけよう」の感謝の気持ちを文にの道徳のパターンである。「ぐんぐんノート」ふきだしでは「ありがとう」「おねがいします」「おやすみなさい」の挨拶言葉指導でおわっている。

N社 単元がない。

K S社 単元名「みんないっしょがいいね」

「いえの中でさがしてみよう」は、「おと・におい・あじ・手ざわりをあつめよう」観点をしっかり持って仕事調べ活動をしてカードに記録している活動が他社には見られない工夫で、良い。「いえのしごとにはちょうせんしよう」仕事をした後、カードに見られたることも記述例、仕事の様子がりアルにわかり、観点が良い。

K S社 単元名「みんなみんなだいすきだよ」

「いえのみんながたすけあっているよ」は、家族愛がテーマだろうか？「わたしもできるようにになりたいな」では、上級生と交流で学ぶようにしている広がりが見られる。「わたしにできることあるかないえでちょうせんしたことをしようかいしよう」「しごとにはチャレンジしたよ」カード発表会に道具を紹介するなどの工夫が授業に活用できる。「いえのみんなが大すきだよ」は大単元になっている。

3. もうすぐ2年生にかかわって

学年末の行事のとりくみは生活科のなかでおこなわれることが多いようであるが、自己や他者の成長や学校生活の移り変わり、春を迎える時期の学びもすっかりやりたいものである。

Ｇ社 国語の関連として「２年生になったら」の作文と教室環境づくり程度。

Ｄ社 「わたしの１年間」は資料をもとにできるようにしたことこの発表会。「ようこそ１年生」は新しい一年生を招待し、学校紹介したり遊んだりして幼児連携をはかっている試みがみられる。「ありがとうわたしたちのきょうしつ」は、新一年生のための準備をしながら教室やお世話になった６年生に感謝の気もちがふきだしにある。結論の押し付け道徳にみえます。

Ｔ社 「もうすぐ２ねんせい」 新しい一年生を招待し、学校紹介したり遊んだりして幼児連携をはかっている試みがみられる。学校とのギャップに困難を感じる子どもたちにとって有効な手立てであろう。

Ｎ社

「おもいでいっぱい はる なつ あき ふゆ」の季節を切り口にしたい出すようにしているのはこの教科書の特徴。「じぶんみつけ」まとも方を本、じゃばらおり、まきものなど示していて参考になる。「じぶんにはくしゅしたいこと」できるようになったことを友達の前で発表するやりかたは、発表の仕方をくふうして互いに認め合うことも出来るとりくみたいことである。「まってるよ あたらしい １年生」幼稚園や保育園児との交流、教室環境づくりをしている。

ＫＳ社

「１年間をおもいでそう」は、できるようにしたことをおもいでして二年生への抱負を作文。「新しい１年生をむかえよう」幼稚園や保育園児とのかかわりの仕方を示唆している。

ＫＥ社

「おもいでしよう」カードや写真を集めて思い出す手立てを示している点が参考になる。「いっぱいできるよになつたね」できるようになったことを友だちやお世話になった人にも見てもらうことにより自信となり自己肯定感も増すであろう取り組みです。「新しい１年生がやってくるよ」ここでも幼稚園や保育園児との交流を取り組み、入学準備を

している。

4. 「またたんけん」にかかわって

町探検は２回に分けて行う教科書も複数あり、下巻の中で大きなウエイトを占めている。子どもたちの目線でみえる身近な地域社会・街に積極的に関わって、ひとやもの・ことからの体験的な学びは空間の広がり、時間の経過と変容、生き様や社会の矛盾にも気づく元となるであろう。

学習したことをカードに表して認識を深めたり、共同で絵地図にかいたり様々な発表表現したりすることは子ども同士また地域の人と結び付け、学びあいを深めたりする。地域の中に生きる子どもたちを地域の人たちとともに育てる。ＫＳ社の「たんけん」シリーズは、自然、お店、みんなのつかうところ、まちのべんり、まちのあんしん、という切り口で見つけている点に工夫が見られる。Ｔ社は秋にも同じところを訪ね、春との違いをさがすことを示唆している。ＫＥ社、Ｇ社では、同じ場所の四季の様子が軽く扱われている。Ｄ社は夏休み以後の取り組み。人とかかわりのようすの写真であるが、働いている場面がほしいところである。絵地図は他社よりも大きな扱いになっていて絵地図作りのヒントもあるのは参考になる。

どの社も「すてきな町」。「町大すき」などと肯定的な面のみが、あつかわれているがはたして町はそうであるか？ 廃れてきたけど頑張っている人たちがいる町とそこに生きる人たち。昔はよかったが、今は変わってしまった。など、少し前と違ってきている町の様子などから、もっと豊かな学びが、できるのではないだろうか？

5. 労働にかかわって

他社に労働に関わる視点がまったくないというわけではないが、社会的なしごと・職業をしっかり見つめる始点をきちんととりあげている

はKS社のみである。花屋さん、だんご屋さん、パン屋さん、運転手さん、図書館の司書などごとをしている写真とともに気をつけていることや、技、たいへんなことなど労働の様子がえがかれている。一つの仕事を初めからさいごまで体験してみるにより本当のことがわかってくる。是非やって見たい体験である。発表の計画やだんごりなどカード化してわかりやすい。いろいろな働く人との出逢い、無機質の町ではなく生きている実感を持つ町の人とのつながりが大すきになり、人への信頼あこがれとなっていくので、大切にしたい学びである。漁師、写真家、大工、お寿司屋などいろいろいな仕事人が登場しているところが良い。こういった点をぜひ参考にしてほしい。

6. 成長・変化にかかわって

自分のこれまでの成長の様子を調べたり（誕生もふくむ）、成長変化していくことを確かめたりして、自分の存在が他者のなかにあること、自己肯定感をほぐくむ。妊娠から出産のとき生まれくるまでを丁寧に学習したいところである。そしてこれまでの成長を資料（写真や衣服、記念の品物・など）集めから振り返り確認し、いろいろなことができるようになって人として一人前になってくよるこびを友だちや家族と感じあいたい。

G社は段階をおって丁寧に成長をたどっている。アルバムなど資料をもとに本や紙芝居、巻物などにまとめるなど丁寧に作品作りをする参考例があり活用できる。インタビューカードを活用して聞き取り記録する。T社は「感謝」することと、その表現がねらいのようす。KS社は、言葉や資料が多すぎの感じがする。D社は友だちのよいところやがんばったところなどをカードに書いて交換しているのは一つの方法として参考になるだろう。その後教科書では大がかりな発表会へと発展する。